

### 保管種駒の含水率の変化と活着率について

林業試験場九州支場 温 水 竹 則  
久 保 田 暢 子

#### 1. はじめに

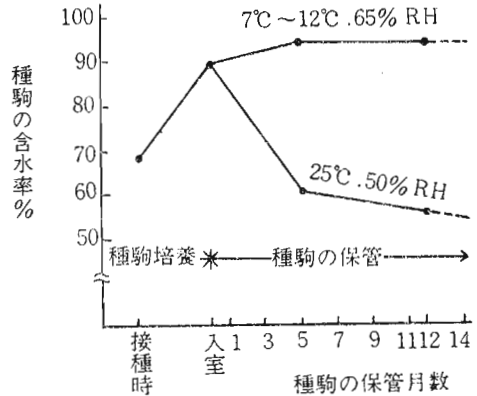
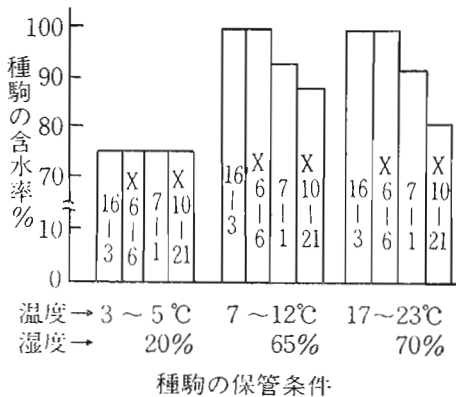
シイタケ種駒の不活着の原因には、栽培技術の不足のほか、気象条件の影響（干ばつ）、種菌培養中のカビ類の混入汚染、保管中の不良化などが考えられる。そのなかで保管中の不良化について、保管温度と湿度およびその保管期間は、どの程度がよいかを知るため、保管種駒の含水率の変化とその種駒の接種試験をおこない、活着率を調査して、種駒の保管温度と適湿を明かにしたので報告する。

#### 2. 試験方法

完全に培養した棒型種駒を培養瓶詰めのまま冷温（3～5℃・20%RH.）、低温（7～12℃・65%RH.）、中温（17～20℃・65%RH.）、高温（25℃・50%RH.）の各区に保管し一定期間の含水率（乾量基準）を調査した。またこれらの種駒をそれぞれの原木に接種し、種駒の活着率をしらべて、種駒の保管条件を検討した。

#### 3. 結果と考察

1) 保管種駒の含水率の変化・各区に6か月間保管した種駒の含水率は、図-1に示すとおり低・中温区では、冷温区より多い。冷温区の含水率は、系統間の



差がないが、低温・中温では、多少の差がみられた。また高温区（25℃・50%RH.）においては、数か月を過ぎると図-2に示すとおり、低温区は保管前の含水率が保持されるが、高温区では極度に減少することが観察された。

2) 保管種駒の活着率・各区に保管した種駒の活着率は、表に示すとおり、保管5か月後の高温区では、含水率の減少が低温区より34%も大きく、活着率が9%も低下し、さらに14か月保管した種駒の含水率は、低温区の1/2となり、活着も著しく不良となった。また冷温区でも室内の関係温度が低い場合（20%内外）は、種駒の含水率が著しく減少して乾燥するから注意を要する。

したがって種駒を数か月以上保管する場合は、中温以下で湿度65%ぐらいの部屋に保管することが必要であると考えられる。また含水率の減少した保管種駒は活着率が低下し、シイタケ菌糸のまん延がおくれ、害菌におかされやすいことが推定される。

表一 保管種駒の活着率およびほだ付きの程度

期間	種駒の保管				種駒の含水率		種駒 活着率	ほだ付き 面積 比	備 考
	場所	区分	温度	湿度	保管 入室時	原木へ 接種時			
5 か月 —	低温室 — 定温室	低 高 対	温 照	7~12	65	89	94	80	} 接種 45.4.30 剥皮 45.8.24
			温	25	50	60	71	19	
			照			93	100	18	
14 か月 —	低温室 — 定温室	低 高 対	温	7~12	65	89	110	97	} 接種 46.1.12 剥皮 46.8.24
			温	25	50	55	45	10	
			照			93	100	15	
10 か月 —	冷蔵庫 — 恒温室	冷 中 対	温	3~5	20	89	41	90	} 接種 46.1.12 剥皮 46.8.5
			温	17~23	65	98	100	11	
			照			93	100	15	

注) 1. 対照は種菌培養後直ちに接種し、保管しないもの。

2. 供試系統 x6-6。